4月27日・5月4日付「日本講演新聞」 2833・34号（前号の続き）

【前回までのあらすじ】10年前の4月20日、宮崎県で家畜伝染病「口蹄疫」が発生しました。当時、西都市の市長だった橋田さんは畜産農家に殺処分へ理解を求めたり、殺処分場を市内に11か所確保し、毎日殺処分の現場に立ち会うなど、激務の日々を送っていました。

家畜の命に花束を ～あの日から10年 3

元西都市長（宮崎県）
橋田 和実
Hashida Kazumi

若者の人生観を変えた殺処分場でのアルバイト

親子の牛の場合

殺処分していたあの時期、家に帰って寝るのは毎日深夜0時過ぎでした。ある日、寝ようとしたら電話が掛かってきました。

電話は飲み屋のご主人からでした。「うちの店はつぶれる。市長、今から飲みに出てこい」と言うんです。

その時は口蹄疫の発生から2か月ほど経った頃でした。夜は外に出ないようにという戒厳令のような感じでしたから街中の飲み屋街にはほとんどお客がいないんです。

「いやぁ、今、殺処分から帰ってきて、明日も行かないといけないんです。早く終息させます。もう少し堪えてください」と電話口で頭を下げました。

殺処分も命懸けでした。牛はおとなしそうにしていますが、何か感じるんでしょうね。急に暴れたりします。角のある頭を振り回したり、押さえている人を蹴ったり。中には顔を蹴られて片目を失明した人や、角で大ケガをした人もいました。

特に親子の牛は大変でした。牛舎から出して殺処分場までトラックで運び、車から降ろしますと、子牛は「母親と一緒に広いところに来た」と喜んでぴょんこぴょんこ跳ねるんです。その子牛を先に殺処分すると親は気が狂ったように暴れます。だから親牛から先に殺処分しないといけないんです。これは本当につらかったです。

中にはおとなしい牛もいます。頭を押さえると、私のほうを見るんです。牛の目は大きくてきれいなんですよ。獣医師が注射をすると悲しそうな目をして、それからバタッと倒れるんですね。

それからこんなこともありました。西都市にも夜遅くまで街にたむろしていた不良グループがいました。15歳から20歳未満の子たちです。

ある市会議員さんから「あの子たちを殺処分場でアルバイトさせてもらえんか」と相談がありました。

すぐ受け入れました。殺処分する時、800キログラムほどもある大きな牛の頭や体を彼らに押さえてもらいました。街中では粋がっていても、その時ばかりはみんな怖がるんですね。

そして目の前で牛が死んでいくのを見て、みんな真剣な顔になっていました。

あの子たちはそれを1か月間やりました。

8月に口蹄疫が終息し、また彼らは街に戻っていきました。

その後、どうなったか。誰も夜たむろしていないんです。

「あの子たちはどこに行ったのか？」と聞いたら、「みんな就職しました」と言ってました。

殺処分場での経験で、あの子たちなりに人生観が変わったんだろうと思います。

そういう厳しい現実の体験をさせてあげたことは、あの子たちにとって自分の将来を考えるいいきっかけになったんじゃないかと思っております。

（宮崎市倫理法人会のモーニングセミナーにて／取材、編集・水谷謹人）

※ 5月4日付の記事は最後のみ掲載しています。

10年前、宮崎の畜産農家は口蹄疫で大打撃を受けました。しかし、その苦難を乗り越えて今、宮崎の畜産農家はとても元気がいいです。牛の値段は10年前の2倍以上になっています。

「希望を捨てなかったら苦難は必ずいい方向に展開していく」という信念が私にあったから市長として口蹄疫を乗り越えられたと思っています。

今回の新型コロナウイルスの騒動も、希望を持ち続けていたらこの苦難の先に幸福が待っていると私は信じています。

私は過去、県議選と市長選を合わせて3回落選しています。3回目は前回（2017年）の選挙でした。

普通、落選したら街に出ていくのが嫌になるんです。でも私は今も毎朝ウォーキングをしながら街ゆく人に大きな声で「おはようございます！」とあいさつしています。

私は「苦難は幸福の門である」「希望は心の太陽である」という人生哲学をこれからも持ち続けていきます。

（宮崎市倫理法人会のモーニングセミナーにて／取材、編集・水谷謹人～終わり）